

最後までがんばる

四年 北川 諒 成

「ええっ生きられるの。」

この本が南極に残された犬の話だとお母さんからしようかいされたとき、ぼくはどうやって犬が生き残ったか気になって、この本を読むことにしました。

この話は、隊員と二十二頭の犬たちが南極のひみつをとくために船で南極へ行った話です。隊員と犬たちは南極で一年間くらししました。一年間たつと新しい隊員と交代します。新しい隊員たちは船で南極に向かいましたが、船の周りの氷が固まって船が動けなくなってしまう、新しい隊員を送るのをあきらめてしまいました。そして、隊員たちはなやんだけれど、犬たちを置いて日本に帰ることになりました。それから一年後、南極に二回目のたんけんに行ったら、タロとジロの犬の兄弟が生きていました。

この本を読んで、いちばん心に残ったことは、タロとジロがペンギンやアザラシのふんを食べて一年間残ったことです。ぼくだったら、ぜったい南極で一年も生きられないのに、犬たちは自力で生き残ったところがすごいと思いました。タロとジロは犬ぞりを引くときも足から血が出るくらいがんばっています。二ひきはとてもがんばり屋さんだと思います。

ぼくは前にキャンプに行ったとき、すごくかみなりが鳴って、こわくてテントの中でおびえていました。でも、家族がいたから安心できました。もし家族がいなかったら、すごくこわくて

何もできなかつたと思います。タロとジロも二ひきだけになって心細かつたと思います。生き残るためにどうすればいいのか考えて行動したから、生き残れたのだと思います。

ぼくは一つ一つの行動がおそいので、自分で考えて早く行動できるようにになりたいです。それと、ぼくは少しでも失敗すると、

「もう無理だ。」

と言ってあきらめてしまうことがあります。タロとジロを見習って、すぐにあきらめるところを直したいです。

二番目に心に残ったことは、他の十三頭の犬たちが死んでしまったことです。隊員たちは犬を残して日本に帰るとき、すぐつらい気持ちだったのが本からも伝わってきました。

もしも、大きな地しんが起きたとき、おばあちゃんの家でかっているにわとりも連れて行きたいです。でも、にわとりを助けると自分の命があぶないときは、助けるのをあきらめます。ぼくは、自分の命をゆう先します。

でも、隊員たちは日本に帰ってきてから、犬を置いてきたことを国民にひはんされました。「犬殺し」と書かれたぶつそうな手紙も来ました。国民たちは隊員たちの気持ちを知らないのに、手紙を送ったりひはんしたりして、隊員たちがかわいそうだと思いました。

この本を読んで、ぼくはこれから大きなかべに当たったときタロとジロのように、あきらめない気持ちをもち乗って乗りこえていきたいです。